

## 多様性を生かして

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。ご臨席の保護者の方々も、きっとほっとされていることと思います。大学を代表して一言お祝いの言葉を述べたいと思います。

### 偽装の年

皆さんが卒業する 2013 年度という年はどういう年だったと思っているのでしょうか。一人一人にとって、様々な出来事があった年だと思いますが、日本という国全体で見たら、一言で言えば、2013 年度は「偽装の年」であったと言えるのではないのでしょうか。レストランのメニューの表示に関わる食品偽装問題、作曲家のゴーストライター問題、学术论文の画像の使い回しなど、それぞれに大きな話題となった問題が立て続けに起こりました。

ちなみに、この式辞にはゴーストライターはおりません。正真正銘、自分で書いておりますのでご安心下さい。

### 石を投げる

ところで、一つ気になったのは、このような偽装をすることは、もちろん非難されるべきことではありますが、非難、非難という合唱の声が大きすぎるのではないかということです。悪いことを「悪い」と言って何が悪い、という言い分もあるでしょうが、そういうあなたはどなのだ、という反撃にどれだけの人が応えられるのでしょうか。

新約聖書の「ヨハネによる福音書」の中に、今で言う不倫をおかした女を石で打ち殺そうとしている民衆に対して、イエスが、「あなたたちの中で罪を犯したくない者が、まず、この女に石を投げなさい。」という有名な場面があります。自らが潔白だという自信のある者のみが他人を批判する資格があるということです。結局、民衆は、一人また一人と全員が立ち去ってしまい、イエスとその女だけが残り、イエスは女に 2 度と罪をおかさないようにと優しく諭したとされています。

実際、自信をもって他人を批判することのできる人はごく少数だと思います。しかし、いったんある人が批判の的になると、それに追従して、批判の大合唱をとげる人の何と多いことでしょう。

「付和雷同」という言葉があります。自分にしっかりとした方針もなく、単にまわりの人に合わせてしまうことです。そして、一斉に声を大にしてバッシングに走る。これは、はたしてよいことなのでしょうか？

もちろん、匡すべき悪事は批判しなくてはなりません。しかし、「悪」であるかどうかは誰がどのように判定するのでしょうか。単に誰かの気まぐれで、誰かが悪者にされてしまっているということもあるのではないのでしょうか？

これから社会に出ていく皆さんには、くれぐれも、他人の言うことを鵜呑みにするのではなく、自分で考え自分で判断する力を養っていただきたいと思います。

## みんなちがってみんないい

3年前の震災のときに、テレビがCMを自粛して公共広告機構のメッセージを流したことがありました。そのときに一躍有名になったものに、金子みすゞの「わたしと小鳥とすずと」という詩があります。自分という人間と、小鳥と、鈴、これはそれぞれに得意・不得意がちがっているけれども、「みんなちがってみんないい」という有名になった言葉で締めくくられています。

この詩の言いたいことは、人は一人一人ちがった人間だけれども、単に一直線に並べて優劣を比べるのではなく、それぞれによいところを評価していこうということだと思います。そして、それを人だけでなく動物にも物にも同じようあてはめるところが、この詩の優れたところだと思います。

皆さんも、それぞれに得意・不得意なところがあるでしょうが、自分も持っている「みんないい」の部分をこれから伸ばして行ってほしいと思います。

## あまちゃんとアイドル

2013年度にはやったもう一つの社会現象と言ってもいいものに「あまちゃん」現象があります。これも、ある意味では「偽装」の話で、主人公のお母さんが、有名な女優の歌手デビューのときの「影武者」であったという話が最後まで重大な筋として語られますが、もう一つの観点として、この「みんなちがってみんないい」という見方もできると思います。

主人公の天野アキは、東京に生まれながら、母親の故郷の北三陸に住んでからは、そちらの方が自分に合っていると思い、それまでの暗い性格から強くたくましい人間へと成長し、言葉遣いまで変わってしまいます。一方、北三陸で生まれ育った、高校の同級生の足立ユイは東京に出て「アイドル」になることにあこがれています。

話の展開としては、3年前の震災の影響もあって、当人たちの思いとは逆に、アキが東京に戻ってアイドルとなり、ユイはついに東京へ行くことがかなわないのですが、話の最後の方で、ユイは、東京に行つてアイドルになることよりも、北三陸で、皆が会いにくるような存在になることを選びます。

ここにも、東京に行こうが行くまいが、また、アイドルになろうがなるまいが、それぞれに、「ちがっていい」という考え方が出ていると思います。これから、皆さんも日本の各地、あるいは世界にはばたいて、生きていかれると思いますが、自分の「ちがっていい」という点を意識して生きて行ってほしいと思います。

## 神戸で学んだということ

「ちがって」いるという点についてもう一つ、この4年間、あるいはそれ以上を、神戸という土地で、キリスト教の学校で過ごしたということの意味を考えてほしいと思います。

大学生としての4年間を神戸で過ごしたということは、皆さんにとって、大きな意味があると思います。神戸という土地は、もちろん首都圏ではなく、同じ近畿でも、京都のような歴史の長い都会、あるいは大阪のような近代的な大都市とは少し違い、ちょっと周辺的なところに位置する都会という、複雑な性格をもつ都市です。自然という点では、北を向けば山、南を向けば海という多様性をもった環境に恵まれています。また、文化的には、中国系の南

京町、西欧の異人館、旧居留地など、外国らしさを感じさせるところも一杯あります。

意外に思われるかもしれませんが、神戸市は、京都市に次いで大学の数が多い政令都市です。神戸という都会はかなり広くて、京都市のように地域的にまとまった感じを抱きにくいので、学生の街というイメージはあまりなかったかもしれませんが、学ぶのにも、山や海で心を癒すのにも適した環境というのはそうそうあるものではありません。

20歳前後という、生涯で一番伸びる時期に、このような多様性をもった都市で暮らしたということは、知らず知らずのうちに、多角的な視点をもつということに寄与しているのではないかと思います。また、それが後の人生に大きな影響を与えたいと思います。今後、一段とスケールの大きな人として生きていくことができるのではないかと思います。

## キリスト教の大学で学んだということ

また、キリスト教の学校で学んだということも、後の人生で大きな意味をもってくると思います。キリスト教というと、ちょっと遠い印象があって、せっかく松蔭という大学に入学しても、チャペルに来ることもあまりなかった人もいるかもしれません。しかし、キリスト教は、日本ではマイナーであっても、世界的に見ればメジャーな宗教であって、ある意味で、世界の中での普遍的な考え方の基盤をなしているとも言えます。まさに、国際都市神戸という土地にふさわしい文化的な背景だと思えます。

そういう環境で大学生活を過ごしたということは、考えようによっては大変貴重な経験であったと言えるでしょう。社会人となる皆さんが、無意識に国際性という素養を獲得しているとしたら、大変幸せなことだと思いますし、今後の仕事に役立つことを期待したいと思います。

神戸という都会での生活の経験と、キリスト教という文化的環境で育ったという経験、すなわち、決して多数派ではないが、多様に触れているという経験を生かして、普遍のかつ多角的な視点をもって行ってほしいと思います。

## 女子大卒ということ

最後に、松蔭が女子大であるということについて触れておきたいと思います。

昨年のNHKの大河ドラマは、同志社大学の創立者の新島襄の妻の八重が主人公でした。その最終回で、新島襄の言葉として紹介された、「知性と品格をみがいた女性には男子以上にこの世の中を変える力がある」という言葉があります。

日本では、新島襄の時代から100年以上を経ても、まだ、男女が全く同じ立場で仕事ができるようになっている職場はそれほど多くないと思います。就職したら、いわゆる「ガラスの天井」のようなものを感じる人もいるでしょう。そんなとき、女の方が、男よりも、社会に貢献できる力をもっているのだという、新島襄の言葉を思い出して下さい。

社会の中で暮していくということには様々な困難が伴います。そんなときに、「女だから」と甘えずに、かと言って「女を捨てて」などというような無理をせずに、しなやかに身をかわし、したたかに生きて行って下さい。さらに、余裕があれば、しとやかさも演出して下さい。

神戸松蔭という女子大の環境で過ごしたということが、社会人としてやっていく上で、積極的な意味をもっていくといいなと思います。男子に任せることができないので、何もかも自分たちでやるしかなかったし、リーダーになるのも、サポーターに回るのも、性別でなく、

一人一人の能力・個性に従って決まるという環境の中で過ごした経験は貴重なものだと思います。それが、これからの仕事に生かしていける力となっていることを期待したいと思います。

## 生きるためのつっかえ棒

今日は、できるだけ明るい言葉を重ねるように心がけてきました。何よりも皆さんを励まして社会に送り出したいからです。今日の式辞の言葉そのものでなくても、いろいろと引用した、いくつかの事例を、何かのきっかけに思い出して、これから強く生きていくつっかえ棒のようにしてもらえたら、幸いです。

未来はいつも皆さんの手の中にあります。たくましく生きて行って下さい。

今日、ここで述べた言葉が、大学を出てからの皆さんの心の片隅に、何らかの思い出を残してくれたら、これに優る喜びはありません。

もう一度、おめでとうございます。